



# 堺 アルフォンス・ミュシャ館と連携した メディアアート展による堺市の魅力創造・発信



## DATA

- 主な連携先・メンバー  
堺市文化観光局文化部文化課主幹 兼 企画係長 花木義幸氏/  
堺 アルフォンス・ミュシャ館館長 岡端敏之氏・学芸員 川口裕加子氏
- 活動地域  
大阪府堺市
- 活動期間  
2019年度
- 活動資金  
堺市と関西大学との地域連携事業

## 活動の目的

堺市が有する質の高い文化芸術資産による都市魅力の創造と対外的な魅力発信の一助となることを目指す

## 連携にいたる経緯

2018年度に堺市博物館と実施した源氏物語絵図の体験型デジタル展示の経験を踏まえて、世界有数のコレクションを有する堺 アルフォンス・ミュシャ館の魅力を実証展示によって発信する取り組みに協力することとなった。

## 活動内容

19世紀末を彩ったアール・ヌーヴォーの代表的画家であるアルフォンス・ミュシャ(1860~1939)の作品を、デジタル展示で紹介するイベントを堺市立文化館ギャラリーおよびグランフロント大阪 ザ・ラボにおいて計3回にわたって実施。2019年度はミュシャ没後80年の節目にあたることから「生き続けるミュシャーアルフォンス・ミュシャ没後80年企画」と題して展示イベントを開催した。

グランフロント大阪においては、ミュシャのポスター作品をモチーフとしたモーショングラフィックス、大型連作絵画《スラブ叙事詩》のスケール感を体験できるVRコンテンツなどを展示。イベント2日目には、堺 アルフォンス・ミュシャ館の学芸員 川口裕加子氏による講演会を開催し、堺市が世界有数のミュシャ・コレクションを形成するに至った経緯とミュシャの生涯をたどりつつ、ミュシャがパリで描いた19世紀末のポスター作品について解説していただいた。

堺市立文化館では、グランフロント大阪での展示内容に加え、装飾図案を用いたデザイン体験、作品モデルの3Dプリンタ出力、装飾パネル内のシーンを仮想空間で体感する作品などを展示した。



## 活動の成果

- 1 仮想現実感(VR)の技術を美術作品鑑賞に活用した例は少ないが、大型絵画のスケール感を体感してもらうには特に効果的であった
- 2 展示用に制作した映像コンテンツやグラフィックスの一部は、堺ミュシャ館で今後の企画や展示に役立ててもらえるように、元データを提供することができた

## 今後の課題・目標

デジタルコンテンツを複合的に活用した展示鑑賞支援の先進的な取組みとして、他の美術館や博物館にも応用していきたい

## 教員紹介



■ 総合情報学部 教授  
**堀 雅洋** Masahiro Hori

専門は知識情報学。情報をわかりやすく伝えるためのデザイン手法、および社会環境での学び(博物館学習、情報モラル学習、防災学習など)を支援するアプリやコンテンツに関する研究に取り組んでいる。



■ 総合情報学部 教授  
**井浦 崇** Takashi Iura

専門はメディア・アート。デジタルメディアにおける映像と音楽の新しい創造性をテーマに、視覚と聴覚の相互作用による表現効果を研究。美術家、音楽家として作品制作も行っている。



■ 総合情報学部 教授  
**林 武文** Takefumi Hayashi

専門は視覚認知情報処理。視覚を中心とした人間の情報処理メカニズムを解明し、ヒューマンインタフェースにおける情報の提示方法を明らかにすることを目的に研究を行っている。



■ 総合情報学部 教授  
**松下 光範** Mitsunori Matsushita

専門はインタラクティブシステムデザイン。様々な情報処理システムの、機能性の高さ(インテリジェンス)と使いやすさ(インタラクション)とを両立するシステムの実現ならびにその方法論について研究を行っている。



■ 総合情報学部 教授  
**荻野 正樹** Masaki Ogino

専門は認知ロボティクス。ヒトが発達段階で身につけていく認知能力をロボットに持たせることで、ヒトの持つ認知メカニズムの原理を研究している。